

〈癒し〉の表象とジェンダー・ロール

— 『ルース』から〈新しい女〉小説へ—

市川千恵子

Florence Nightingale による近代看護改革によって、1850年代後半以降、看護は教育を受けた女性の職業として専門性を高めていくことになる。Elizabeth Gaskell の *Ruth* (1853) のヒロイン、Ruth Hilton はまだ看護が respectable な女性の職業として確立する前に、周囲の反対に直面しながらも、伝染病患者の看護と自分を捨てた男性の看護を引き受ける。家庭崇拜主義の支配下で徐々に変化を遂げた19世紀後半のジェンダー・ロールやセクシュアリティをめぐる問題が、いかに文学的想像力を刺激したのかを再考するうえで、ルースの自己犠牲的な看護行為はひとつの手かがりを与えてくれる。本稿では『ルース』における看護から、女性医師の誕生という社会・文化的コンテクストと世紀末の〈新しい女〉小説までを視野に入れて、人を癒す行為 (healing art) の表象がジェンダー・ロールの再定義といかに連動していたのかを検証したい。

『ルース』における看護

ナイティンゲールの登場が看護婦のイメージを神聖化させたことは言うまでもない。彼女は看護を女性の聖性と自律を融合させた女性のための専門職と位置付けようとした。しかし、異性の身体に触れる行為は、ときに看護される側にエロティックな幻想をかきたて、看護は聖と性の相反するイメージを体現する仕事として表象されることも少なくなかった。例えば、Henry Wadsworth Longfellow の詩に謳われるのは、兵士たちがその影にキスをするほどの愛おしさを感じさせたナイティンゲールの姿である。病院という promiscuous な空間において、看護婦は容易に性的欲望の対象となりえた。¹ ナイティンゲールの書簡 (1855年9月9日付) には、制服や給与体系から行動に至るまで詳細な規則の構想が記されており、特に配慮されているのは看護婦と兵士の接触である (*Letters* 151-56)。ギヤスケルの作品に登場する堕ちた女のなかでも、ルースには聖なるイメージが付与されて

おり、利他的な看護がそのイメージを強化することは疑うまでもない。² だが彼女の看護にも、聖と性の相反するイメージが読み取れるように思われる。では、次に小説のなかでルースの看護がどのように表象されるのかを具体的に検証することしよう。

Wales で Bellingham が病に伏せたとき、ルースは彼の看護をしたいという強い意志から、医者に治療用のヒルの使用法もその後始末の仕方もち心得ていると伝える。あまりにも若い娘が看護の責任を負うのは無理だと彼は判断するが、“she is no common person” (79) という印象を抱き、敬意をこめて接することを考慮すれば、看護の知識と献身的な態度は、すでにこの場面においてヒロインの内なる力として前景化されているのである。

Benson 家にひきとられたルースは家庭内の教育によって教養、道徳、信仰を身に付け、厳格な中流階級家庭の子女の家庭教師を勤めるほどの「レディー」へと成長する。その過去を知られ、雇用主から解雇された後、彼女は有給の仕事につけずにいたが、教区の医者から看護婦として働くことを示唆される。本人からその選択を打ち明けられたジェマイマは驚き、ルースの教養や徳目の点から、“I don't think you are fitted for it!” (388) と反対する。それに対してルースは “Would you not rather be nursed by a person who spoke gently and moved quietly about than by a loud bustling woman?” (388) と切り返す。この場面での二人の会話には新旧の看護婦像が示される。労働者階級の粗野な女性の仕事、そして教養と美德を兼ね備えた中流階級女性の職業という新旧の枠組みから捉えると、ルースは新しい看護婦像に近い。だが、ジェマイマを説得するルースの言葉、“At any rate it is work, and as such I am thankful for it. You cannot discourage me—and perhaps you know too little of what my life has been—how set apart in idleness I have been—to sympathize with me fully.” (389) に暗示されるのは、彼女の職業の選択と贖罪の試練が完全に切り離されてはいないということであろう。

Eccleston に熱病が発生したとき、隔離病棟で病気の猛威をも寄せ付けずに働くルースの聖なる姿は、他者に希望を与える光そのものである (428)。死に瀕した人々をケアするルースに対し、患者の家族からの感謝や称賛の言葉が重ねられることによって、彼女の聖性がいっそう強調されていく。特に次の発言に注目したい。

“Such a one as her has never been a great sinner; nor does she do her work as a penance, but for the love of God, and of the blessed Jesus. She will be in the light of God’s countenance when you and I will be standing afar off. I tell you, man, when my poor wench died, as no one would come near, her head lay at that hour on this woman’s sweet breast. I could fell you,” the old man went on, lifting his shaking arm, “for calling that woman a great sinner.” (429)

この男性の怒りはルースの聖性を称揚するものに他ならないが、同時に彼女の看護には過去に犯した罪の贖いというイメージが払拭しきれないことをも喚起してしまう。ここではその両面性ゆえに、看護の表象が有する機能が現前化する。病める者だけでなく、身内の病や死に心を痛める人々をも癒すルースのヒロイックな姿は、人々からの尊敬をもたらし、出生の秘密が暴露された後に亀裂の生じた息子 Leonard との関係の修復にも寄与する。すなわち、看護はルース自身を救済する役割を果たしているのだ。

看護婦としてのルースは、ナイティンゲールの *Notes on Nursing* (1856) における “confidential nurse” の定義とまさに合致する。それは指南書が提唱した女性像とも重なる。

[. . .] she [confidential nurse] must [. . .] be strictly sober and honest; but more than this, she must be a religious and devoted woman; she must have a respect for her own calling, because God’s precious gift of life is often literally placed in her hands; she must be a sound, and close, and quick observer; and she must be a woman of delicate and decent feeling. (125–26)

美德、信仰心、観察力という徳目を有するルースは伝染病の脅威に打ち勝つが、ベリンガムの看護によって命を落とすことを考えれば、その行為は他の人々に対するものとは異なる様相を呈するのである。

ルースは病気で無力な彼に対して愛情を感じずにはいられない (441)。彼女はジェマイマの反対に対し、自分には人の体に触れ、安らぎを与える特別な力があると主張した (388)。愛情を捨てきれない異性の身体に触れる行為は、性的な要

素と切り離し難いであろう。ベリンガムとの関係においてルースは常に従属的な立場に置かれていたが、今やその命は彼女の看護に委ねられており、支配と服従の関係は逆転している。つまり、ルースは無力な彼の肉体を支配する唯一の存在なのである。

有能な看護婦としてルースは、“She had gone up to the wild, raging figure, and with soft authority had made him lie down [. . .], speaking in a low soothing voice all the time, in a way that acted like a charm in hushing his mad talk.” (443) と、ベリンガムを思い通りに支配することに成功する。そして、過去には叶えられなかった、愛する人への看護を全うするのだ。ベリンガムがうわごとで繰り返す「スイレンの花」(446)は、ウェールズの森での二人の親密な場面を想起させる。ルースが感染し、床に伏せる様子は“a sweet, childlike insanity” (448) と描写されている。その看護が男女の権力関係の転覆と性の規範の侵犯にも似た行為なのであれば、彼女の病は狂気でしか表現しえないだろう。“The Light is coming.” (448) という最期の言葉に漂うのは、まさしく充足感である。ベリンガムを癒すルースの自己否定的な行為は逆説的ながら彼女に自己肯定を、換言すれば愛の成就と欲望の充足をもたらすのである。

女性医師の登場

『ルース』では看護を担う者の聖性が専門知識をもつ医者よりも病に効力を発揮する。しかし19世紀は医学の近代化が進み、医師の権威が増大した。医学は社会不安を体現する労働者階級や女性の身体をその研究対象とした。19世紀後半の売春問題をめぐる議論や性病予防法が示唆するように、女性の身体はますます医学上の規制と管理の対象となった。健康をめぐる国家政策はある程度ジェンダーをめぐる政治でもあったのである (Annandale 27)。

英国における女性医師の誕生は、女性の高等教育と雇用機会の拡大をめぐる戦いの歴史において画期的な勝利であり、同時に女性の身体を男性医師による独占的支配から解放するという身体政治の覇権争いにおいても、確実なる前進であった。英国女性の医学界への参入がアメリカやヨーロッパ諸国に比べ、はるかに遅れた背景にあるのは、文化に浸透した根深い女性嫌悪に他ならない。女性を排除する意見の大半が、男女の身体的差異を根拠に、体力と知力という点で女性が劣

り、さらに月経、妊娠、更年期という身体上の変化、また妻と母親という「女性の使命」を理由にあげ、医学は女性に不適切な領域と主張した。女性医師第一世代の Elizabeth Blackwell と Elizabeth Garrett (後に Anderson) は、それぞれアメリカとフランスで医師免許を取得した。だが、1858 年の the Medical Act に基づいて英国内の医師免許資格認定と登録の権限を有する医事委員会 (the General Medical Council) は、1859 年にブラックウェルが、1866 年にガレット・アンダーソンが医師登録後、外国での医師免許を除外するという決断を下し、事実上、女性の締め出しを図ったのである (Blake 43)。

医学部への女性の入学を唯一認めたのはエディンバラ大学であった。アメリカの女性医師の状況に触発された Sophia Jex-Blake を含む 7 名の女子学生の入学を 1869 年に認めた後、大学はクラスを男女別に分けたうえに、女性対象のクラスを正規の授業と認めず、さらに学期末の試験会場で彼女たちが入場できないように仕向けるなど、様々な措置により女性の医師免許の取得を妨害した。ジェックス=ブレイクは医学部を相手に訴訟を起こし、その戦いを克明に *The Medical Women: A Thesis and a History* (1886) に記した。彼女の戦闘的な姿勢や文章表現は Harriet Martineau や Francis Power Cobbe といった同時代のフェミニストから支持を受けるが (Todd 1918: 320)、一方では世論のみならず、第一世代の女性医師からも批判を招くことになった。彼女たちは女性としての社会貢献というレトリックをもとに、世間の批判をかわす戦略をとっていたからである。

積極的に執筆活動を展開したブラックウェルは、性病予防法や少女売春問題に最も意欲的に取り組んだフェミニスト団体 the Moral Reform Union の発足時からのメンバーであり (Jeffreys 18–20)、女性の身体の専門家として国家が女性を病原とみなして管理する法の非道性を訴え続けた。ブラックウェルは the London School of Medicine for Women³ の冬学期開始の特別講演において、女性が医学の領域に参入することの意義を社会福祉の進展への貢献として位置づけ、特に公衆衛生や予防医療に従事することを期待した。女性の進出を阻止する勢力に対する配慮から、あえて彼女は性差に着目して女性特有の医学への貢献を説いたのだ。しかし、同時にそれは専門領域を自ら狭めるというリスクも負っていたのである。

道徳的優越性や観察力といったヴィクトリア朝の女性の徳目のもとに、新たな領域への参入を意図するレトリックは、女性医師の支援者であったアメリカの医

師 Samuel Gregory の発言にも見出される。彼は “Women always have been and always will be physicians. Their sympathy with suffering, their quickness of perception, and their aptitude for the duties of the sick room, render them peculiarly adapted for the ministrations of the healing art” (1) と、医学を女性の領域と位置づける。この定義にナイティンゲールの『看護覚え書』の序文、“every woman is a nurse” (3) からの影響を見出すのは容易い。〈癒し〉は医学のマスクュリンな要素を巧妙に覆い隠し、ジェンダーのヒエラルキーをも攪乱しながら、新たな女性の仕事の創造のために修辭的に利用されたのである。

ベルン大学で学位を取得したジェックス＝ブレイクが中心となり、1874年にロンドン女子医学校が開校された後、医学の領域に参入を成し遂げた新しい女性たちは、作家の想像力のミューズとなり、文学作品のなかでヒロインとして生まれ変わることになる。ここでは男性作家による長編及び短編小説における女性医師像を概観しておく。

Charles Reade の *A Woman-Hater* (1877) に登場する医学生 Rhoda Gale は餓死寸前の貧困に直面しているところで、「女嫌い」の Harrington Vizard に救われる。彼の領地の村でローダが衛生改善を推進し、人々の信頼を得て、ヴィザードの心を軟化させる様子は、ブラックウェルの戦略通りである。だが、それ以上に重要なのは、あたかも医学研究との「結婚」を宣言したローダが思いを寄せる相手が、患者の美しいオペラ歌手の女性であるということだ。これは医学教育による「脱女性化」という女性の進出を阻止する保守陣営の議論の反映、そして家父長的異性愛主義制度からの解放を希求する〈新しい女〉の生と性の選択という両義の読みを可能にするのである。

Wilkie Collins による短編 “Fie! Fie! or, the Fair Physician” (1882) では、女性医師 Sophia Pillico の男性患者への診察行為における身体的接触がコミカルかつエロティックに描かれ、前者は後者の性的欲望を刺激する存在であるかのような。周囲の女性にとり女性医師という〈新しい女〉は、男性を誘惑し社会秩序を乱す危険分子となる。現実の女性医師の患者の多くは女性と子供であったが、ソファイアは男性の診療は女性の権利拡大の一環だと考えている。彼女に診察される Fitzmark がその行為や発言を恋愛感情と勘違いする一方で、彼女自身はそれを「おろか」だと捉え、常に精神的に優位に立つ。女性医師の職業意識と世間の偏見の

乖離を揶揄したこの作品において注目すべきは、病室が視線の交差による支配と服従の力学を生じさせる劇場的空間であることを示唆する点である。この要素がさらに顕著に表れているのが Arthur Conan Doyle による “The Doctors of Holyland” (1895) である。

コナン・ドイルの短編を貫くのは、ジェンダー・ロールの境界の侵犯者に動揺する男性医師の視線である。保守的な Dr. James Ripley が住む村に若い女性 Dr. Verrinder Smith が開業する。彼女は専門知識のうえで彼をしのぎ、議論でも負けはしない。彼は怪我をした際に、彼女の手厚い治療を受けたことを契機に、嫉妬と嫌悪の対象であった彼女に恋愛感情を抱き始め、求婚する。彼は初めて診る主体から診られる客体となり、劇場としての病室のなかで心身の支配者から被支配者へと役割を変えられる。それゆえにヴェリンダーの眼差しに支配されたリプリーは彼女に精神的に隷従するのである。

各作家のスタンスに差異はあるが、概観した三作は総じて女性医師を有能なプロフェッショナルとして描いており、いずれも文学的想像力がジェンダーをめぐる政治的变化に敏感に反応し、メタファーの形で取り込んだ格好の例だと言える。

〈新しい女〉小説における〈癒し〉

女性医師が「文学的アイコン」となる 1880 年代から 1890 年代は、活字媒体がジェンダー・ロールの討論の場として活気を帯びた時代でもある。フェミニスト作家は女性の個人的経験を社会的経験として発信し、読者に議論への積極的参加を求めつつ、社会の意識形成と変革に働きかけた。こうした政治的な動機は、ジェックス＝ブレイクの指導のもと、エディンバラの女子医学学校⁴で学んだ Margaret Todd の *Mona Maclean* (1892) におけるヒロインの職業と結婚の選択にも表出する。

物語はモナが医学部の中間試験に二度も失敗することから始まる。彼女は休暇を過ごすスコットランドで偶然にも若い医者 Ralph Dudley と親しくなるが、彼に自分が医学生であることを打ち明けられずにいることを悩む。ダドリーの方は彼女に惹かれながらも、親類の店を手伝うその社会的階層が気になる。二人の関係を新たな局面に進展させるのは、雇い主との間に子供を身ごもった若いメイドの Maggie の命を二人が救うエピソードである。聖なる看護婦のイメージをまとうモナの姿を目の当たりにしたダドリーは、彼女への思いを確信する。しかし、モ

ナにとってこの経験は病室のロマンスにとどまらない。

ダドリーが薬を調達にでかけている間、モナがマギーの震える体をずっと抱きしめている様子は次のように描写される。

More and more heavily the burden of the sorrows of her sex pressed on Mona's heart as the night went on; more and more she longed to carry all suffering women in her arms; more and more she felt her unworthiness for the life-work she had chosen, till at last, half unconsciously, she fell on her knees and her thoughts took the form of a prayer [. . .]. (355)

ここではマギーの病気は個人的かつ社会的な病として提示されている。堕ちた女の体は個人の身体と社会制度との関係性を再考する政治的な場でもあるからだ。この看病を機にモナの医学に対する姿勢は一変する。また、このエピソードはモナのフェミニストとしての政治的姿勢をも明らかにさせる。マギーの体を一晩中強く抱きしめるモナの姿は、性的に脆弱な若い女性を男性の欲望の視線から、さらには女性の身体を支配する男性医師のまなざしから守護する姿のようにも映り、当時ほぼ男性の独占の状態にあった医学の世界に女性医師の場所を模索し、確立しようとするジェスチャーとも考えられるのだ。この看護の場面において、作者はヒロインの職業に対する目的意識の目覚め、ヴィクトリア朝の“the Woman Question”、さらに同性に対する女性医師の「使命」といったものを注意深く戦略的に結び付けているのである。

無事に医師免許を取得したモナがダドリーと結婚し、二人が開設した診療所の最初の患者がマギーのような貧しく年若の妊婦であるという結末が発するメッセージは読み取りやすい。つまり、二人の結婚は多くの〈新しい女〉作家が希求した理想のごとく平等で、さらに仕事のうえではモナのほうに優先権が与えられているのだ。換言すれば、二人の間では公私ともにジェンダー・ヒエラルキーが修正されているのである。

社会・文化的言説において〈癒し〉の概念は女性性を強化しつつ、一方でジェンダー・ロールを刷新する重要な役割も果たしていた。Olive Schreiner の *The Story of an African Farm* (1883) の第二部第12章“Gregory's Womanhood”のなかで描かれる男性による女性への看護のモチーフには、ジェンダーの境界を曖昧化

し、横断するための比喩として〈癒し〉が利用されている。だが、この小説が〈新しい女〉小説の「先駆け」(Stead 64)と称されるのを決定づけたヒロインの女性規範に対する痛烈な批判から先に検証しておきたい。

Daniel Deronda (1876)において主人公の母 Leonora Halm-Eberstein が、中国女性の纏足になぞらえて女性規範という檻を批判したように(541)、Lyndall も “We fit our sphere as a Chinese woman’s foot fits her shoe, exactly, as though God had made both—and yet he knows nothing of either. [. . .] We wear the bondage, but our limbs have not grown to them; we know that we are compressed, and chafe against them.” (185–86) と、同じ比喩を用いて女性の生と性の抑圧への不満を吐露する。これが信仰の懐疑に悩む Waldo との会話のなかの発言であることから、ヒロインの批判は社会の精神基盤である家父長的キリスト教にまで向けられていると解釈できる。しかし理想を実現しえない自己の無力さゆえに、“I will do nothing good for myself, nothing for the world, till someone wakes me.” (191–92) と彼女は自家撞着に陥るのである。⁵

リンダルは未婚のまま出産するが、赤ん坊は数時間後に死亡してしまう。疾走し、床に伏せる彼女の居場所を探しあて、看病をかけてくれるのが Gregory Rose である。彼の求婚にリンダルは服従しないと宣言したうえで同意した。だが、そのときリンダルには恋人がいて、すでに身ごもっていた。指輪を受け取りながらも、束縛を嫌って彼の求婚を断り、代わりに自分に尽くすが、見返りを求めないグレゴリーを結婚相手として選ぶのだ(224)。

この作品においても病室は劇場的な空間となる。過去に自分を裏切った女性のために、グレゴリーはひげをそり、女性の服に着替え、無償で看護の仕事を引き受ける。その選択は奇妙に映るが、病室はそうした社会的な制約を取り除く舞台装置になりえるのだ。リンダルはグレゴリーのなかに “a true woman—one born for the sphere that some women have to fill” (193) と「女性性」を見出し、それゆえに “You will serve me, and greatly” (224) とグレゴリーに無償の献身を要求した。その一方で彼は、“I don’t believe in a man who can’t make a woman obey him.” (202) と発言するように、女性の束縛を強いる男でもある。

ジェンダーの二元論に適合しそうでないグレゴリーが看護を「演じる」ことは、無意識に抑圧していた内なるものの発見であり、さらに自己肯定へと結びつく。

He lifted her. Ah! A shrunken little body, he could feel its weakness as he touched it. His hands were to him glorified for what they had done.

“Thank you! that is so nice. Other people hurt me when they touch me,” she said. “Thank you!” Then after a little while she repeated humbly, “Thank you; they hurt me so.” (259)

病床のリンダルに漂う敗北感は、才気に溢れながら理想を実現しえない同時代の女性たちの人生の敗北感を代表するものである。グレゴリーはかつてリンダルに求められたように献身する。自分の手だけを受容する彼女の体に触れる行為によって、彼は擬似的な親密さを体感し、支配欲を昇華させるのである。

ジェンダー・ロールの定義、問い直し、修正という各局面において、〈癒し〉はキーワードとして機能していた。ルースの看護は自己犠牲として美化される行為だが、そこにあるのは自己放棄と表裏一体の欲望の充足であり、グレゴリーの看護も同じ視点で捉えることができる。19世紀から20世紀を通じて看護の担い手の多数が女性であった。シュライナーの看護の表象はジェンダーの概念を大胆に書きかえ、グレゴリーの両性具有という自己の不安定性とセクシュアリティの揺らぎをも提示する革新的な試みであったのである。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第22回大会(2010年10月3日)での口頭発表に修正・加筆を施したものである。

- 1 神聖さの象徴の白い制服は男性患者の性的幻想をかきたてる記号であった (Bashford 58)。
- 2 ルースの聖性については拙稿「売春 — 混迷のボディ・ポリティクス」(360-61)を参照されたい。
- 3 ジェックス=ブレイクが中心となり、1874年にブルームズベリー地区に開校された。
- 4 ジェックス=ブレイクはロンドン女子医学校の運営をめぐり上層部との軋轢を経験後、1886年にエディンバラ女子医学校を開校した (Todd 1918: 496-98)。

- 5 ヒロインの先鋭的な規範批判とプロットとのバランスの欠如は作品の綻びとして指摘される (Showalter 198; Ardis 66; 川本 61)。

引用文献

- Annandale, Ellen. *Women's Health and Social Change*. London: Routledge, 2009.
- Ardis, Ann. *New Women, New Novels: Feminism and Early Modernism*. New Brunswick: Rutgers UP, 1990.
- Bashford, Alison. *Purity and Pollution: Gender, Embodiment and Victorian Medicine*. Basingstoke: Macmillan, 1998.
- Blackwell, Elizabeth. *The Influence of Women in the Profession of Medicine: Address Given at the Opening of the Winter Session of the London School of Medicine for Women*. London: George Bell, 1889.
- Blake, Catriona. *The Charge of the Parasols: Women's Entry to the Medical Profession*. London: Women's Press, 1990.
- Collins, Wilkie. "Fie! Fie! or, the Fair Physician." 1882. *Wilkie Collins: The Complete Shorter Fiction*. Ed. Julian Thompson. London: Robinson, 1995.
- Doyle, Arthur Conan. "The Doctors of Holyland." *Round the Red Lamp*. New York: D. Appleton, 1895.
- Eliot, George. *Daniel Deronda*. 1876. Oxford: Oxford UP, 2009.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. 1853. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Gregory, Samuel. "Female Physicians." *The English Woman's Journal* 49 (1861): 1–11.
- Jeffreys, Sheila. *The Spinster and Her Enemies: Feminism and Sexuality 1880–1930*. 1985. London: Pinifex, 1997.
- Jex-Blake, Sophia. *The Medical Women: A Thesis and a History*. Edinburgh: Oliphant, Anderson, & Ferrier, 1886.
- Longfellow, Henry Wadsworth. "Santa Filomena." *The Atlantic Monthly* 1 (1857): 22–23.
- Nightingale, Florence. *Florence Nightingale: Letters from the Crimea 1854–56*. Ed. Sue M. Goldie. Manchester: Mandolin, 1997.
- . *Notes on Nursing: What It Is and What It Is Not*. 1860. New York: Dover, 1969.
- Schreiner, Olive. *The Story of an African Farm*. 1883. Ontario: Broadview, 2003.

Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton: Princeton UP, 1977.

Stead, W. T. “The Book of the Month.” *Review of Reviews* 10 (1894): 64–74.

Reade, Charles. *A Woman-Hater*. 1877. *The Complete Works of Charles Reade*. New York: Thomas Y. Crowell, n.d.

Todd, Margaret. *The Life of Sophia Jex-Blake*. London: Macmillan, 1918.

—. [Travers, Graham]. *Mona Maclean: Medical Student*. 1892. London and Glasgow: Collins, 1910.

市川千恵子「売春 — 混迷のボディ・ポリティクス」松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』溪水社、2010.

川本静子『〈新しい女たち〉の世紀末』みすず書房、1999.

(釧路公立大学准教授)

Abstract

Representations of the Healing Art and Gender Roles: From *Ruth* to New Woman Novels

Chieko ICHIKAWA

This essay explores the way in which the redefinition of gender roles in the late nineteenth century developed in tandem with the figurative use of the healing art, by examining the representations of nursing in *Ruth* and *The Story of an African Farm*, along with the rise of medical women in the social and cultural contexts.

Ruth's devotional nursing offers an insignia to her saintly figure, but it also signals different functions of the healing art. Her nursing of Bellingham, in a gesture of self-sacrifice, is profoundly interconnected with her fulfilment of desires and contentment in our close attention to the power-relationship between nurse and patient in the sickroom.

The women's entry into the medical profession was a triumph in the long struggle for the reform of higher education for women and a significant challenge to the hegemony of the body politic. Medical women became literary icons between the 1870s and the 1890s, the period witnessed the cultural and political conflict of gender relations. In Margaret Todd's *Mona Maclean*, the heroine's awakening of her motivation in a medical career by nursing a fallen woman betrays the correlation of the Woman Question, medical women's mission for the same sex and the heroine's aspirations to subvert gender hierarchies in both matrimony and profession.

Male nursing in Olive Schreiner's *The Story of an African Farm*, a forerunner of New Woman novels, serves to amplify the metaphor of the healing art as an attempt to blur and transgress the dichotomy of gender. In a theatrical sick room, Gregory Rose, in the disguise of a female nurse, discovers his sexual identity and acquires a sense of the sublimation of desires towards Lyndall, through his tender touch on her body.

